



TACが青年部事務局を
兼務するメリットはこれ

JAグリーン近江

滋賀県で最大規模の管内面積をもつ。日本穀物検定協会の2105年産米の食味ランキングにおいて特A評価を得た「みずかがみ」や「秋の詩」といった主食用米以外にも酒米や近江牛等の生産が盛ん。現在、10人のTACのうち女性は3人。



point1

青年部活動の新企画が より生まれやすくなる

青年部員とTACは、圃場でも青年部活動でもよく顔を合わせる。日常会話の中で新たな活動の発案がなされるという。その結果、婚活や消費者との交流イベントの開催、直売所での販売会の実施など、毎年新企画に取り組んでいる。



point2

営農のスペシャリスト 育成につながる

TAC経験者は、その後も営農指導員など営農に携わる任務につき活躍する。青年部員をはじめ農業者に育てられ、現場での対応力が身に付き、JAの営農事業全体により影響を与えているという。



左から、岡本さん、蒲生さん、湯ノ口さん、TAC4年目の稲葉菜津希さん。
青年部では今年、イベントで販売するためのポップコーン用のトウモロコシ『イエローポップ』を栽培している

がっしりスクラムを組んで 共に飛躍するぞ！

滋賀県 JAグリーン近江

JAグループとして、地域農業の担い手となる

若手農業者への対応が急務となっています。こうした中、活躍が期待されているのが、地域農業の担い手に向くJA担当者・TAC。今月号から四回連載で、TACの活動に精力的に取り組むJAをレポートし、その役割を考えます。一回目は、滋賀県のJAグリーン近江です。

植田美智代Ⅱ文 text by Michiko Ueda 前田Ⅱ史Ⅱ写真 photo by Hiroshi Maeda
JA全農TAC推進課Ⅱ企画協力

「もしもTACがいなかったら、ぼくらの世代はもっとJAと疎遠になっていたかもしれませんね」

認定農業者で、JAグリーン近江青年部部長を務める蒲生聡さん(34)は、穂が揺れている田んぼを見つめながら話す。

「祖父の代からこの地で農業を営んでいます。親の世代はJA離れが進んでいると感じていました。ぼくも、JAとは接点がないというか、銀行のようなイメージが強かったです。だから、当初はTACが出向いてくれても、特に相談することはありませんでした。でも、田んぼにいれば声をかけてくれるし、地域や農業にまつわる情報も教えてくれる。徐々に要望でも相談でも何でも話せる

ようになりましたね」

若さという強みを生かす

JAグリーン近江でTACの活動がスタートしたのは、二〇〇八年のこと。TACは担い手の要望を聴き、新商品の導入などを通じて経営の改善提案をする。たとえば、担い手から新たな栽培品目の相談を受け、カット野菜に使用する加工用キャベツの栽培を提案し、販売先への斡旋も併せて実施するなど、これまでいくつも実績をあげてきた。

現在JAグリーン近江では、一〇人のTACで約五五〇軒の担い手を訪問。二〇一三〇代の若手が多いのが特徴だ。「若手職員は、JAや農業に対する先

入観があまりなく、その分担い手の話に素直に耳を傾けられる。だから、あえて入組一年目の若手職員を任命することもあります」

と、TACを統括するJAグリーン近江 営農振興課 課長の今村和哉さん(44)は話す。JAでは、若手農業者との接点をさらに増やそうと、TACが青年部事務局を兼務する。TAC六年目の岡本慎平さん(29)は、事務局を兼務することのメリットを実感している。

「担当エリアには、三五歳未満の担い手が約四〇人います。多くの人が青年部に入っており、活動時に顔を合わせることで、より親交が深まっています」

一五年には、青年部で販売促進用のステッカーを作成。青年部の研修会で市場を見学したとき、JAグリーン近江産の野菜が目立っていた。存在感を市場でもっと示すにはどうしたらよいか、みんなで考えて発案したものだ。「TACがステッカーのデザインや色の案を何パターンも提案し、JA内の調整役を担ってくれたことで、スムーズに話が進みました」

と、青年部副部長の湯ノ口絢也さん(29)は振り返る。ステッカーを野菜の出荷用の箱や商品パッケージに貼ることで、市場での産地アピールにつながっているという。

「自分たちのJA」という意識

青年部では、四年前からJAの新入職員の農業研修を受け入れている。

「営農に力を入れてほしい」「職員の意識改革につなげてほしい」と、TACに話したことから実現しました。年齢の離れた職員には遠慮しがちですが、青年部活動などで気を許せる関係になったからこそ、できた提案でした(蒲生さん) 研修は、青年部員の農家が受け入れ先となり、二日間の日程で行う。農業経験のない新入職員が「JAの基本は農業であり農家である」という当たり前のことを、強く実感できるよい機会ともなっている。

「さまざまな活動をしてきたことで、JAを自分たちの組織だと感じるようになってきました。JAへの意見や要望もたくさん出るようになりましたね。JA役員との意見交換会では、青年部員の直売所の出荷手数料の引き下げなどを求めています」

組織の変化を力説する蒲生さん。横でうなずきながら湯ノ口さんも言う。

「将来のJAを担っていく若手同士、互いに高め合っていきたい。TACにはもっと生産現場に注意深く目を向けてほしいし、ぼくたちも伝えるようにしています。結果として、共に成長し、地域農業が活気づいていけばいい」